

日本野鳥の会愛媛県支部 発表
2007年8月29日

日本野鳥の会愛媛県支部
(支部長 山本 貴仁)
保全担当 松田 久司
電話 0894-23-1546
メール:VZZ02040@nifty.ne.jp

各報道関係者 御中

二見くるりん風の丘パークにおける 2例目の野鳥衝突死の発見について

昨年8月に、風力発電機に衝突死したと見られるトビの死体が発見された二見くるりん風の丘パークにおいて、本年5月26日にもトビの死体が発見されていたことが、8月29日までに日本野鳥の会愛媛県支部の調べによりわかった。

これは、2007年8月14日、日本野鳥の会愛媛県支部に届けられた写真をもとに分析した結果、判明したもの。写真は5月26日の12時ごろ、二見くるりん風の丘パークを訪れていた八幡浜市在住の男性により撮影された。見学に訪れた際に、同所の2基ある風車のうち、東側の1号基の下の南東側の道路上に落ちている鳥の死体を発見し、鳥がかわいそうで対策に役立ててもらおうと思い撮影した。

この写真を同支部の松田らが確認したところ、この死体はトビであり、風車に衝突して左の翼を切断され、死に至った可能性が極めて高いことがわかった。

同所では2006年8月1日にも、西側2号基の風車の下で風車の回転翼(ブレード)に切断されて死んだと思われるトビの死体が発見されており、本年6月発行の(財)日本野鳥の会の研究論文誌「Strix (ストリクス)」第25巻に同支部松田による論文が掲載されている。10ヶ月足らずの間に2例目が見つかったことになる。同所の風車は出力850kWで、タワー高55m、回転翼の回転面の直径が52m、回転翼の最高地点は81m。現在、佐田岬半島で稼働している風力発電機の中では比較的小型のものといえる。発見された場所は国道197号線沿いで公園化されているため訪れる人の数が多く、このことにより発見されたと思われ、佐田岬半島の他の44基の風力発電施設のうち国道に面していない、人目につかない場所でも同様な事故が起こっているが見逃されていることも考えられる。

今回の事例は定期的な調査ではなく、偶然訪れた方が発見されていること、野鳥の死体は地面に落ちているとそれを食べる動物(イノシシやタヌキ、ネコなど)が持ち去ってしまうことを考慮すると、もっと多くの鳥類が犠牲になっていることが考えられる。佐田岬半島は春と秋の渡り鳥の移動シーズンには、非常に多くの渡り鳥が多数通過する場所として全国的に知られており、この中にはサシバやハチクマなどの絶滅のおそれのある種も含まれている。風力発電施設が1年中稼働し続けることにより、こうした渡り鳥への影響が知らぬ間に累積して大きな影響となってしまうことが懸念される。

死体が見つかったトビは、「地上や水面に餌を見つけると、急降下して脚でさらう。主に死体を食べるが、ネズミ、ヘビ、カエル、ミミズ、鳥などの生きている小動物も捕食する」*といった性質がある。風力発電施設はその設置により開けた空間が生まれるが、そこをトビが食べものを得やすい環境として積極的に利用し、食料を探す行動の様式が風力発電施設へ衝突しやすい状況

を作り出している可能性がある。

風力発電事業者は、定期的かつ計画的に風車の下の地面上の野鳥の死体を探索し、あるいは回転翼（ブレード）部分を記録できる監視カメラを設置するなどして、鳥類の衝突について定期的な調査を行い、その結果を公表し、衝突が多い時期や時間帯については、稼動を一時停止して事故を防ぐことを至急検討し、実行に移すべきである。また並行して、衝突を未然に防ぐための基礎的な調査を進め、有効性が認められた対策は実施すべきである。

参考

*原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>P.54

「地上や水面に餌を見つけると、急降下して脚でさらう。主に死肉を食べるが、ネズミ、ヘビ、カエル、ミミズ、鳥などの生きている小動物も捕食する。」

野鳥保護資料集第21集 野鳥と風車 P.155-186

「眼が回転している翼に接近するにつれ、網膜上の回転翼の映像は非常に速い動きになり、網膜がそれについていけないほどになる。この時点で網膜上の像は透けて見え、かすんだ状態になり、おそらく鳥は通過しても安全な地域と解釈し、悲惨な結果になる。」



図1 5月26日に発見されたトビの死体



図2 二見くるりん風の丘パーク内の位置関係